

# 博多小女郎波枕

近松門左衛門作

## 上之卷

歌船を出しやらば。夜深に出しやれ。帆影  
見るさへ氣にかかる。フシ長門の秋の。夕  
暮は歌に詠むてふ門司が關。下の關とも名  
に高き西國一の大濠。北に朝鮮釜山海。西  
に長崎薩摩唐和蘭の代物を。朝な夕なに  
引受けて千艘出づれば入舟も。日に千貫目  
萬貫目。小判走れば銀が飛ぶ。フシ金色世  
界も斯くやらん。地沖に何待つし檣垣造り十  
四五反の廻船に。船頭舟子は襦袢着て足踏  
延す舵枕。四五人の乗業ども櫓の上につゝ  
くつく。そよと波音船影に。心を付ける蚤  
取り眼物案じ顔も頼すいたる。中に頭の毛  
剃九右衛門。生れは長崎國龍り。コリヤ  
汝達。まだ市五郎三藏が舟は見えいろ。心  
許ななばい。心たまぎりや夜さどくなつて。  
身だまじりともせない。首尾よからうば  
筑前邊へ此の舟廻し。柳町のしやうくゝて  
いども請出して。上方さなへ突走る。表  
の間借切つた上唐人。船頭が馴染筑前迄乗  
せなけりやたらぬといふ。仕果せにや筑前  
へはゆかぬ船門出よかく。よか便聞かう  
ばい。表の乗業呼うでわたい咄どもして紛  
らさん。地あつと答へて平左衛門呼びにお  
るれば其の跡は。鬼とも組むべき男ども編  
片取つて敷かすやら。茶出しに唐茶摘み込  
む。注出す色は薄けれど頭を頭と敬ひし。  
禮儀ぞ仲間のフシ花香なる。地表の乗業小  
町屋惣七生得感惣都育ち。呼ばれて櫓に  
割膝し。船頭馴染に押付けての便船。御  
尋ねなくとも御挨拶申す筈。無禮御免と手  
を突けば。ア、堅い。同船致し一つ筈  
の食事喰べるは一門同然。サア御手上けら  
れ。此の五人は我等が仲間。他事なう咄し  
明かす中。近付になつてお咄しなされ。斯  
う申す某は長崎者。九右衛門と申してそつ  
と致いた唐商賣。是は同國惣平次と申す仁。  
次は上方小倉屋傳右難波屋仁左。其許呼び  
に參つたは。阿波の徳島平左衛門と申して  
髪月代致さるゝ。船中の事缺き心措かずと  
お頼みなされ。して其許は何處何方。我等  
も生國長崎。伴の時分親に連れて生れ所を  
引越し京住居。父が名は小松屋惣左衛門。  
同名惣七と申す者。賣買のため筑前へは毎  
年の下上り。どなたも船中平くわい御免。  
地よいお近付き求めしと禮儀仕舞へば膝朝  
れ。詞直せば驚伺旬はや千年の馴染程。心  
解けたる朝霜のフシ奥底もなくなりける。  
地九右衛門顔色打解けて。船中の淋しさ  
物語り程伽になる物はない。俺どもが二十  
七の年。薩摩者と喧嘩した咄。嘘ぢやなか  
ばん間かつしやれ。九月の七日九日は氏神

の祭。本踊りいろ唐子踊いろ。見事なこと  
ばん。本興善町といふ所で石御器に一二杯。  
肝の束へ諸白を引かけた薩摩二蔵。肥満男  
であつたばん。諏訪へ踊見がい行く行違ひ  
に。長か赤鯛の小鱈が此方の。俺どもが脇  
腹さなへ當るが最期。引撮んで壁へかいな  
すらうと思ふて。小尻を逆手にやつくりり。  
それはく見事な事であつたがなう。他國  
者に投げられては國へ歸つても成敗。死ぬ  
る命は何處でも一つと。二尺八寸ひき抜い  
た。コリヤン。ほたゆるなと又引擔いて投  
けたがの。角のある溝石でくさ。頭の顛骨  
が粉々微塵に打割れた。舟では割れたと  
いふは忌々しい。頭の顛骨が走つたく。  
血が走るいろ涙が出るいろ。頭抱へて雇人  
に擔はれ。小宿さなへ往んだがの。今で思  
へば無慚らしけに。其様にせでも大事なか  
たん。上方家は氣がよかけん。此様な事は  
あるまいと。仕形交りの高咄。フシ皆安閑  
と聞きゐたる。關サア。關京のお客お咄しな

され、次第々々に所望せん。上方は色所定  
めて深い譯がある。地お咄しあれと口々に  
乗すれば乗つてさればく。親惣左衛門  
吟味強く。京大阪では鑄半文我が物で我が  
儘ならず。毎年の筑前通ひ幸に柳町の小女  
郎とは。仰より互に逆上り。是非當年は請  
出して。女房に持たる、合點持つ約束と。  
半分聞いてア、おつしやるな聞く迄ない。  
我等も博多へ參る者此の一座五人が。小女  
郎殿の身請の期間。大盡くわつとおはづ  
みと毛刺が起きて膝立つれば。ようく身  
請の大盡様こりや誰が大盡ぞ。小女郎様の  
大盡と一座がはらりと取廻し。座興も過ぎ  
ればむつとして。勝るか但し悔るか。心  
くるく喘たぐる胸を押へて。ゑへんゑへ  
ん。今朝から風引き頭痛致す。跡の咄は後  
刻々々。何方も是にと挨拶し。思ひ惱みつ  
立須ひ漸う。フシ下へ這下る。地身請する  
程内證が暖かで。風引いたとは何處やら  
足らぬ和郎さうなど。悪口苦口小倉口より。

波押切つて来る早船此の船目當の一文子。  
眞黒になつて。フシ漕付けたり。地九右衛門  
初め立騒ぎ。關ヤア三藏市五郎。首尾はく。  
近年の拍子よく。荷物受取金渡し彼方も機  
嫌此方も仕合。荷數手形に引合せ渡しませ  
うと聞く嬉しさ。船頭起きよ。地舟子も來  
い荷物請取れまつかせと。心も勇む虎の皮  
百五枚。仕合せすれば氣の藥。海老手の人  
蔘五箱で三十斤。仕損ずるは手廻しの緞子  
七櫃二百本。船から船へ移しの麝香四十斤。  
何と遠見に見付けられはせんんだか。けも  
ない事いはしや續船が十五箱。さりながら  
五絲緞の襦子が十二丸。世話入つた漆七桶。  
連の強いは一昨日の夜の月影。照のよい艦  
甲百斤。地まつ斯う仕済し歸りました。天  
地の恵み明星程な珊瑚珠が八十粒。手形の  
表是迄渡しました。此の一通は來夏舟の割  
符。迎船にお出でなされとの言傳と。地渡  
せば取つて押載き。手柄功名休めめされ。  
二人の衆にも酒おませ。關お目出度いお頭

様。御褒美をしつかりと。地御酒も祝うて下されうと。オクリ皆本へ船にフシ乗移る。

地九右衛門相仕等招き寄せ。小聲になつて何れも見すや。荷物を船へ積む折から乗合の京の奴。垣立より顔差出し。合點行かぬと思ふ面相。生けて置いたら頬けた叩き。

後日の難儀見る様な。切殺しては大事の門出血を見るが忌々しい。縊殺して海へ投り込め。地下人奴もありさうな油断するなまつかせこんだ。皆の家拔るな心得たと。鉢巻禰尻裏け。腕骨試し力試し。合の舳際を小楯にて時分を窺へサア来いと。楯下るるも忍び足。處は沖津汐風の外は一味の船の中。聞く人もなし見る人なし。人は知らじと思ふこそ。フシ結局身の告知り。地下人が喚くまつかせ聲。楯の上へ躍り上るを追續いて。彌平次傳右衛門二人が中に取巻いて。宙に指上げ是わいなと。投り込む波の哀れや下人フシ底の水柄となりける。地サア一人はしてやつた。地惣七

奴が見えぬ探せ。地コリヤ。爰に傳馬込にといふ聲に。惣七水棹追取つて狂ひ出で。地ヤア海賊奴等。様子一々見届けた。地死ぬるとも一人死なうかとそつほう滅法打立つる。後へ廻つて市五郎。隙を窺ひ攫付けば取つて投げ。投げられながら足首をしつかと取り。眞逆様にすでんどう。

と響く波音に捲りかけ。大勢かよつてだんほらほ。邊も知れぬ海の中眞逆様に打込んで。地サア仕済した目出度いと笑ふ聲。地惣七はつと心付き見れば傳馬の中々に。物音せば悪からんと。纏解いて楯を押し立て。悪魚毒蛇の口よりも通れ難き場を通れ。一反ばかり漕出で。テ、皆々骨折々々。

地惣七是からお禮申す。此の返報は重ねてと。心急げばゑいさつさ。ゑいや運は傳馬にあり。押すや楯腕の續くだけ命。限りと。いひきにて。すいちやゑんちや。すはひすふいてう。ひいたらこまいみさいは

んや。さんそ。うわうわう。地ア、おきや。なう欲市殿其の拍子では踊られぬ。錢太鼓の三味線知らずば知らぬと頭からいうたが好い。長崎の伊左衛門様とは違うたもの。もう踊らぬぞや。それで藝が上るものか。三味線弾き止むまでサア。踊りやといひければ。なんほでも踊らぬ。三味線やめて此方も石碓か跛ひかしやれ。何ぢや跛ひけ。盲目と思ひ侮るな。地目二つ持つた汝等に。いで物見せんと三味線振上げ。フシ聲をあてどに追廻す。地亭主奥田屋

四郎左衛門臺所から立出で。地こりや何ぢや欲市。嗜め大人氣ない。禿どもも跪いた遣手に告げて叱らずぞ。ヤイ重之丞。今日は小女郎様の母御の十三年忌。追善のため身揚りして。小女郎様は奥の間に經念佛してござるでないか。附いて居る太夫様の親御の事。線香でも立てうと思ふ氣はなうて。盲目相手に何事ぢや。否々妾ども二人

錢太鼓稽古して居たりや。欲市の三味線で

邪魔しやりんす。フシ其の錢太鼓が猶悪い。  
物の稽古も時がある奥へ往て附いて居  
よ。二人ながらとつと住け。コリヤ欲  
市。表の二階に宰府の源様が来てござる見  
舞うたか。地やつちや一角せしめんと。  
人の巾着當にして。貰はぬ先の締結り  
宰府の客へと取りに行く。百年経ねど。衰  
へは。今身の上に小松屋惣七。下の關の大  
難に命一つを拾ひ得て。長博多へこがれ着  
きしかど身に附く物は手足より。他に何の  
當もなく。知邊の方へも身を恥ぢて訪ひ音  
信は絶えしかど。小女郎が情忘れずオトリ  
戀しき。風の吹立つる。オトリ柳町には來た  
れども。金銀なければ買すほり己れと心奥  
田鼠の。門を覗いつ退いて見つ案じ佇み居  
る風情。内には乞食と矢り聲。餘り物は  
遺つて了うた通りや。フシくと慥食なり。  
擧扱はは物貰ひと人目には見ゆるよな。  
成り果てたり仕なしたり。此の風俗で小女  
郎に逢ひたいというたりとも聞入れじ。聞

入れてから小女郎が恥。思ひ切つた顔見ま  
いと立歸る後より。チ、待ちやくと重之  
丞。コレ今日は太夫さんの志の日に當り。  
施の一錢と差出しながらハア此の乞食は絹  
布を着てゐると。顔差覗いてヤアお前は  
京の惣七さん。なう太夫さん惣七さんの乞  
食に成つてごんしたと。呼ばれば掻伏つ  
て逃ぐるを往なさぬ待たんせと。帯に縋つ  
て止むる間に。家内も驚き駆け出づる小女  
郎は表に走り出で。笠かなぐつてほんにさ  
うぢや嬉しやよう來て下んした。此の有様  
はどうぞいのと。何の様子もステ聞かぬ先  
から泣く涙。コレ四郎左様奥へ連れまし  
て咄したうござんす。如何にもくお馴  
染の惣七様。御用あらば御意なされと亭主  
が情に打連れて。オトリ入るより早く縋り  
付く。戀しゆかしはいはいでも知れた二人  
が中。此のお姿は親御様の御勸氣でも受け  
ての事か。様子がなうては叶はぬ筈。お  
前の心に此の小女郎はまだ傾城ぢやと思つ

てか。此の身は麻に居るとても心は疾から  
女夫ぞや。肩裾結び手を引いて。人の戸口  
に縋るとも交はした詞違やせぬ。今日は  
母様の十三年の命日。お前に逢うたは親達  
が。あの世から手を取つての引合せ。女  
房健に暮したかと一口いふ事ならぬかと。  
眞實見ゆる涙の玉男もはらく聲願ひ。  
小女郎息災にあつたの。一年ぶりに顔を見  
て。よい姿も見せよい事も聞かす事か。聞  
いても。毎年の如く諸色を仕込んで下る  
所。下の關にて海賊船に乗合せ。家來は眼  
前海へ沈めさせ。我が命さへはふくの仕  
合にて此所まで逃げのび。商賈の荷物衣類  
は其の儘船に捨置き。肌に一錢貯へなけれ  
ば二度に二つの下着を賣つて。今日迄の露  
の命を繋ぎしぞや。此の度の下りには請  
出し。女房に持たんとの深き契約其の金銀  
も人手に渡し。詞を違へ望みを叶へぬ我が  
本意なさより和女が恨みん心の不便さに。  
言譯やら顔見にやら。見苦しき身も恥ぢず。

爰へ来て面目もなき物語と、フシ涙に聲を曇

らせり。地よう打明けて下んした。寶は頭

物お命さへあるなれば。わしや嬉しうござ

んする。わたしが心でお前一人は如何なと

なるおいとしや肌寒かろ。お顔がたんと細

つたと。着ながら上着ふはと着せ。フシ抱締

めてこそ泣き居たる。地表に血氣の下男。

大盡様の御來臨と鳴り喚くヤレ人が来る此

方へと。男の手を取り身を寄せてオクリ奥の

へ一間に入りける。地客は過ぎつる海賊

ども。まつ先立つて毛剃九右衛門。彌平次

傳右仁左平左。市五三藏サアッざれと。

引きする雪駄の金にあかした衣裳つき。各

さるせ羅紗すためん。かるさいらんけん縮

子天鷲絨。下着上着も渡り物。頭は日本副

は唐との襟唄。ちくらく手くらの一夜檢校。

終に目馴れぬ出立ちばえ。奥田屋に搖ぎ込

み。座敷に居流れ毛刺が諸色受込んで。差

配らしけに勿體顔。亭主薄々見知りがあ

らう。廊の縦横十文字。昨日迄端せせりし

た我々。俄分限は見らるゝ通り。今日か

らは太夫狂ひ。来る途次見て置いた一文字

屋の江口。丸屋の勝山同じ家の薄雲。油屋

操和泉屋小倉。車屋の大磯此の六人を請出

して。是に居らるゝ人々の物言伽。明日迄

待たぬ今日の中に首尾させい。地是は鐵い

と四郎左衛門飛んで出づるをやれ待てて。

亭主が留守では興がない。云付けて呼びに

やれ。畏つたと硯引寄せ書附けて。呼びに

やる足走書早う往て来いお吸物。大座敷も

一つにせい。子供泣かすな女房どもに藥

飲ませ。何や何ちや花車が煩ふか。それ挾

箱持つて来い。油断召されな人蔭用ひて養

生が第一。地持合せたはづまうと蓋押開き

一包。一つ選の大人蔭一斤餘り投出し。

四郎左子供は幾人ある。娘が一人男が二人

ござります。ヲ、よい子持。小さけれど

此の珊瑚珠。對で秤目が八匁二人の子に提

けさしやれ。お娘が着る物に有合せた緞子

三本緞子五本。此の紳縮縮裏に好からう。

地綿の代迄相添へて。投出す擲出す頂くに

亭主がフシ腕を草臥れける。地四郎左衛門

恠として。地お禮より先づ肝が漬るゝ。何

時の間に此の様な。地大分限者にお成りな

れたと。問詰められて間に合ひ詞。地きつ

いかく。江戸商ひ間綴く。佐夜の中山無

間の鐘。撞當てた福々長者さりながら。

此の鐘撞くには行法がむつかしい。長者經

とて。寺に傳はる縁起の目錄聞かせたいと

打笑へば。亭主横手を確と打ち扱有難いお

經。我等もちつとあやかる様に。其のお經

授け下されとせがみ立てられ。地然らば聽

聞仕れと何やら知らぬ憤帳。殊勝らしけに

取出し吝い事の嘘八百。長者經と扱へ聲張

上げて讀みにけり。

長者經

地そも此の。無間の鐘の濫觴を尋ねれば。

地竺の大金持。月蓋と名に高き。さつても

客齒い。フシ長者あり。佛是に示さんため朝

なくの頭陀の行。鉢々も空耳潰し伝とも。

すんともフシいはれぬ佛の方便にて。光はさながら。一步小判の山吹色。金と見るより吝嗇長者。佛の箔を剥がさんと。欲から入る、手の内を釋迦の水管に仕掛けられ。惜しや悲しや南無阿彌陀佛。此の撞。鐘を建立す。されば穢い長者が心末世の今に止つて。先づ初夜の鐘を撞く時は。諸行無常に惜しやフシくと響くなり。後夜の鐘を撞く時は是生。滅法な事とフシ響くなり。晨朝の響きは。生滅滅多に入用知れず。フシ寂滅入らざる鐘の聲。一文惜しみの百八煩惱此の鐘の音を聞く人は。現世にては分限の金持未來にては。無間の釜煎り斯る。不思議の撞鐘を。諫かにフシ撞くべからず。擧行法の次第といつば絹も袖も着る事ならず。木綿蒲團も榮耀の至り荒孤引いて起臥の。フシ身は慣はしの奈良茶粥。精進潔齋菜入らず。晝夜にたつた二度の節季は尻裏け。往來の中をちよここ走り。ちよここ脱けて。落ちてある物フ

シ只置くな。輓ても土をコハリ擱んで起きるは七つ起き。質を取らずば金貸すな欲しい物は買はぬが徳。月夜に夜作はせぬが損。稼ぐに追付く貧はなし芥子を千にも割木の焚様。必ず灰を取る事なかれ。捨てる物は何にもない。鍋の煤煙では細眉作り。稽の切は瘰癧の妙藥。水なき井戸は梯子の入物。鼠の尾まで錐の鞘。ナホス指せ千世傘。人に貸すなフシ鯉魚節。播粉木播鉢砥石白薬研まで。目にこそ見えぬ貸す度に。フシ減らずに戻る例はなし。コハリさて其の外は愛嬌つき合ひ。始末貯蓄讀書算盤秤目の。上を見れば方圖がない我より下を手本として。右の條々ナホス守るに於ては微塵積つて山となり。長者の金言疑なし無間の鐘とは名ばかりにて。現世も未來も背かねば自然と榮ゆる福德縁起聽聞。あれと語りけり。堪否とも應とも申されぬ。世界中が此の通りに身持つたら。私等が商賣はフシ取奥田屋とぞ笑ひける。地座敷の隔ては障子一重。彼方の騒ぎししと小女郎が身に應へアある所にはある物かな。五人六人の太夫達請出さう。何違ふ彼遣ろ是遣ろと。金銀財寶は塵埃。父様や母様の貧な暮しを見た時も。能はぬ金が欲しいとは夢程も思はずして。今日といふ今日あちらの身請が羨しく。妾や金が欲しうなりました。仕合せのよい人を。妬みは道でフシなければども。如何な男ぞ顔見てやと。障子の隙よりさし覗き。ヤアありや妾が近付。まさかの時は心便りになりましたよと。力を付けてくれた人。金借つて來やせうと進出づるを引止め。近付は内證人も聞く。女郎の口から金貸してと身の恥は思はずか。恥を包むも事によるたつた今いいた事。來月は筑後の客が私を請出すと。出口の佐渡屋と薄約束。お前の下りを月よ星よと待受けたりやこんな首尾。人手に渡れば妾や生きて居ぬぞや。金借つたとて返せば恥にもならぬ事。地妾次第と振切れば遣るも涙行く涙。隠して座

敷へ繰歩み。毛剃が側へ坐ればばつと衣の香の。四邊の人はうろくと。顔を見合はす荒男俄に嗜む衣紋付。フシ鬼が花見る風情なり。毛剃さん久しいな。妾や此方様へ無心に來た。此方に大きな葛藤が出來て。急に身請をして貰はねば。ならぬ首尾になりたれど肝腎の物が無い。地かねぐの詞もある此方の才覺調ふまで妾が身請の成程。金貸して下んせ頼みやするといひければ。日本一の粹様金貸して下んせとはいひ憎い事。二言と聞かぬ。お前の用なら千兩でも萬兩でも。コリヤ亭主。小女郎様も一所に身請け行きたい所へ遣ります。金は毛剃が飲込んだ。女郎方の見ゆる内。小女郎様借りました。フシ飲めや謠へと騒ぎ立つ。ア、待たんせくあの障子のあちらに今いうた。大事の男が來て居さんす。連れて來て禮いはせませす程に。毛剃さん。詞違へて下さんすな。男冥利商冥利盛言ござらぬ。お供なされの詞にいそいそ立

歸る。太夫さん御出と呼ばはる聲。門から色の掴み取り勝山江口大磯に。寄來る波の大騒ぎ。座敷に一杯入込んで。薄雲さんみさを様小倉さん。三人はお跡からそりやこそお敵と色めいて。毛剃が連ども現を抜かし。フシ顔に餘念はなかりけり。九右衛門聲かけコレく亭主。爰にはちつと用がある。妓様方口の座敷へ。跡から見ゆる太夫方も爰へは無用。おつと此方へ來給へと。亭主に連れて立廻る。フシ女郎も旧舎は穩當なり。出出るも如何出ぬも如何。小女郎に引かれて惣七は。障子押明け立出づる顔と顔。互に見合せヤア。小女郎が馴染の男。今思ひ出した其方が事な。地ヲ、汝等に逢ひたかつた。ヤア人はないか此奴等は下の關の。跡いはせじと毛剃が連ども大聲上げ。頼拵きかすな打殺せと。蹴立つる盃爛の。轉けて疊にたぶく。濡れから起つた喧嘩さうな。大事にはなるまいかと上する女子下男。ちろつく顔も青ざ

めてフシ生きた心地はなかりけり。毛剃一寸動きもせず。ア、騒ぐまい。此の九右衛門が思案がある。彌平次。残らず女郎衆の側へ行け。跡はおれが受取つた。いやさうでない我々が相手になる。親仁一人心許ない。ヤア此の毛剃ひけ取る男と思ふか。汝等が居れば喧しい。とつと、行けと睨め付ければ。そんなら行きます。地親仁次第と打連れて。オクリ表の。座敷へ出でにける。小女郎は跡先知らず。惣七に引添うて二人の目許に氣を配る。コレ若い人惣七殿。此の中の事一言いうても物がないぞおつしやるな。此の方どもの商賣言はずとも見られた通り。何事も身が大事と思ふから。此の中のこと怵へさしやれ。いやといはしやりや事になるヤ。怵へさしやれ。小女郎を此方へ請出すと此方の詞が反古になり。小女郎も可愛や此方々々と心中を立通し。女郎の口から金貸せとまで恥を捨てゝの志。無にしてやらしやるはそり

やいかい邪慳。悪い事はいふまい此方の仲間へ這入らしやれ。小女郎も此方に添はせ。五十貫目や百貫目の金は取換へて。親御の息がかゝらすとも物の見事に取立てましょ。仲間が多うなる程此方は損なれど。運を力にする商賣運弱うては埒明かぬ。此の様な場を通れた命冥加な運強い此方。九右衛門が力になる人と見てコレ手を下る。仲間へ入つて下されと詞はさけても居やひ腰。いやといは、切りかけんず。氣色面に見え透いたり。惣七も手詰の返事仲間へ入れば家の大使命の仇。いやといへば小女郎を。人手に渡すのみならず命迄取らるゝ。何れの道にも死ぬる命國法をや頼むべき。小女郎にや添ふべきと。二つの心身一つに定め。かねてぞ居たりける。

申しこれ惣七様。あなたの商賣は知らぬが。駕籠に乗る人駕籠昇く人。地品は變れど行く道は同じ事。金も取換へ何から何迄世話やかうとの心入れ。お身に悪い事でもなし。あつというて仲間になり。早う妾と起臥を一所にしようとは思さぬか。お爲にならぬ筋ならばいやと返事をいひきらしやんせ。此方さんに添はれねば生きて居る小女郎ぢやない。女房にしなと殺しなと。いやかおうか。生死の。大事の返事でござんする。急ぐ事はないぞやと懐に手を差入れ。テ、此の汗わいと。鼻紙ありたけ拭き捨てる。濡で破るゝ人の身の。フシ嗜み難き道ぞかし。惣七はつと打首背き。調得心致した只今より仲間になり御指圖は行くまい。承り及ぶ長崎には物の堅めに血酒飲むとや。地唄りでない惣七が心底。腕引いて誓を見せんと。片肌脱けばア、見えました。人にごそよれ何の此方に偽あらう。改めて孟事地皆来い〜と。フシ呼び集め。小女郎殿嬉しかろ。亭主身請の惣代金何程ぞ。書付是にと差出す。追取つてさらりと讀み。小女郎殿共七人の。身請代金千四百五十兩な。増金があつてやかましい五十

兩は亭主に遺る。千五百兩是受取れと。一兩二兩の七百五十兩方目出たい仲間入り。皆兄弟より他事なうなされ謠へ〜。歌おんらが在所はの。奥山のと、うちの。でんぐり〜栗の木の木の根を枕に轉寝。此の小女郎戀する山家の。品物で南無阿彌陀佛帶解いてこれ。ござれ抱いて轉寝。面白いぞと。フシ樂みける。地町の夜番あわただしく。人をあやめ法を背いた科人が。此の扉へ入込んだと上の町から客改め。一人も客兼外へ出る事なりませぬ。地捕手の衆がはや爰へといひ捨て。亭主を連れて駈出づる。動せぬ自慢の九右衛門始め。六七人がぐんにやり〜。俄に顔色茹菜の様にしを〜と。コリヤ堪らぬ。どうぞ舟へ行く道は外にないか。金の出るには構はないか。土の底へは這入られず。天へ昇る梯子はないか。隠蓋隠笠があら欲しやと。我が身一つを片付け。フシ兼て頼み居る。小女郎が手を取つて。門口に顔を配り固唾



を飲んで居る所に。内か隣りがぐわたくく  
捕つた捕つたと喚く聲なう悲しやと  
一同に。腰を抜かして魂のフ身に添う  
たるはなかりける。地亭主四郎左立歸りア  
ア氣遣ひないく。此の博多の殿町で。  
飛脚殺して金取つた奴。壁隣の揚屋で捕へ。  
代官所へ引きました。此方の事ではない  
ないといへば一度に顔を見合せ。ア、有難  
いヤレ希い。可惜肝を潰したと溜息はつと  
ついたり。世並の悪い痘瘡に。フシ二番湯  
かけし如くなり。長居は無益惣七殿。京  
へ上るサアく皆々いなうく。地女郎衆  
は駕籠で舟場まで。一口いうても八人が亭  
主さらばと立出づる。七人一度に身請とは。  
聞くも及ばぬ大々盡。お一人々々顔に書  
付け張付けたい。地ナウ藥劑と聞くとそ  
髮嫌やく。お手柄のお名が顯れう。顯れ  
るは猶氣がかり。何にもいふなと出でて行  
く。男自慢は七人の鼻に。顯れ 三重

中之卷

市たて。地屋財家財の類賣控賣に相場  
なし。戸欄箆筒塗長持。燭臺椀家具吸物椀。  
組板佛壇何や狩野の三幅對。表具ばかりも  
百貫に編笠提灯。南京の八奴から九奴を。  
鐙に見込みの中脇差の鍋も釜も煤り鎌子も。  
聲も上げて粗道具。賣の子の竹の細道具。  
ありとある物塵も灰も。猫も値打ににや  
ん奴。五分と。フシ飛んで時鳥。フシ守。本尊  
懸碓。踏築壺も罷り出て。金になれとや  
ハ口々に付けて。ナホス雜市に。町  
内騒ぎ 三重。やかまし。地主菱屋嘉右  
衛門興覚め顔にて斬來り。是は狼藉  
千萬何事ぢや。此の家は我等が貸家。主は  
小町屋惣七といふ。西國商人。夫婦連で十  
日ばかりの逗留で大阪へ下る。跡にはあの  
婆たつた一人。留守の事はお家主頼みます  
といひ置き。今日か明日は戻られう。お姥  
もお姥。留守居とは何の爲これ親父。先づ  
和御寮は誰なれば。よい年をして京の町の  
作法知らぬか。町所へも断りなく。人の

留守に踏込み覺意賣拂ひ。捌きは何とする  
事。此の心清町一町の束ねをする年寄。則  
ち家主うつかりと見て居よか。地姥も一所  
に詮議する隣りが町の會所。サアく歩び  
やと喚けども。姥は涙に顔傾け親惣左衛門  
手を束ね。お家主と申しお年寄御尤々々。  
我等は惣七奴が爺。小町屋惣左衛門と申し  
て生國は長崎。二十ヶ年以來上方居住致せ  
ども。資本なければ何賣も抄取らず。地山  
科邊に逗留致し。故郷力に惣七奴が西國通  
ひ致せども。仕合したとの便りもなく。ど  
うかかかと思ひ暮す折節。地端々人の取  
沙汰小町屋の惣七は。西國で大きに儲け。  
博多の傾城請出し。心清町に檜造り節な  
しの見世を張り。風體は無人の暮しでも。  
内證の榮耀は千貫目持と。噂する程心得が  
たく。地夜前始めて尋ね参り沙汰に違はぬ  
内の諸道具。代物に悔り致し。地姥めに問  
うても委しき様子は知らぬと申す。地各も  
商人我等も七十八迄商ひで食べた者。脚返

しの利なればとて儲けるには方圖がある。

僅か十兩十五兩儲けてさへ吹聴して悦ばせた正直孝行な惣七奴。一人の親に隠すからはろくな銀とは存ぜぬ。後に募つてお町内お家主へも難儀をかけ。其の身も人並の死をせぬ奴。今斯う致すも親の慈悲。邪の銀は身につかぬと申す事。骨身に泌みて思ひ知らせ。憂しほ踏んで正道の商に取付く心付けん爲。俄に道具屋へ走るやら古鐵買を呼ぶやら。心急いでお町内へ無禮。お家主へ付届け申さぬは。眞平々々幾重にもお詫言。貸家札出して下されませ。お家は明けますくばかりにて。下ぐるは金柑頭なり。御親父のいひ分承り届けたさりながら。惣七殿には口合家請もある仁。後日の念に御親父の一札。留守居の姥も判を取る。サア會所へ同道いざざされと門の戸はたと引き立て。天の岩戸にあらねども爰にも紙の貸家札。残らぬ早古道具フシ明家とこそなりにけれ。フシ博多小女郎

は。町風に。馴れし夫の惣七が。

ぶなき分限波の上何百里とも知らぬ火の心づくしを過ぎし身は。京大阪は隣にて。夫婦打連れ歸りしが。夫締めて。墨黒に貸家札こりやどうぢや。ハツくと云ふより詞なく。潛戸押明け入りに。湯水を飲まん鍋釜も。疊もあけて閑古鳥。泣くにも泣かれず興さめ果て。明いたるばかりなり。裏の疵にこたゆる小笹原。實の子にどうと坐しければ。緩りとして居さんす所であるまい。家主殿。内儀様と妾とも親しうて。先度下る時にも。土産に大阪の三好下駄頼むぞやとおしやんした。譯の悪い仕方。妾や屹度詰聞かうと。走出づるをこれく。ぬ事貸家といふは名ばかり。破れ家を手前普請根太も追付け張る管で。板も買置く。家賃といへば二ヶ月三ヶ月先へは遣れど滞

らす。町義交際悪もなき身。姥が行方も知れぬは。如何でも下の沙汰でなし。方々に預置きし金銀荷物に就いての事か。何れの道でも命ある中一夜も爰では明かされず。エ、是非に及ばぬ惣七が運も是迄。更紗の財布ともに投出せば。お笑止とも何

りの仕合力に叶はぬ。大阪の遣ひ餘り一步細金少々あり。寄つて分けて取れ暇を遣る。さらば。更紗の財布ともに投出せば。お笑止とも何ともお辭儀申すもお慮外。又の御縁と口上を。捻つて見れば手にさはる。一步小判も八九兩。はつと腰耳に水臭き。半季一季の名残なくオクリ連立ち表に出でにけり。首隣へ聞ゆれば姥が會所を抜けて来て。ながお出でなされ。中々でもないこと。あさまし欲心に海賊の仲間に入り。道に違つた銀儲けを結構な事と思ひ居る。木の空に引張らるゝは今の事。菜大根肩に置いて

も。正道な儲けは三文でも。身に付くとい

ひ聞かせた詞反古にして。何で出来た屋財

家財。是が我が子の敵ぢやと。おいとし

ほや涙片手に道具屋集め。二足三文に賣捨

て家も明けて其の上に。隣の會所で町衆

の前に畏り。何やら断りいふたり。地皆お

前故の御苦勞と。スエテ涙ぐめば涙ぐみ。

此れ姥掛税に入置きし割符の手形。是が

あれば一大事。入物ともに道具屋の手へ渡

つたか。いや／＼掛税は賣れたれども。其

の割符は残して親父様の鼻紙入に收めてぢ

や。そんな事氣遣ひせず早う町をのけまし

たい。地ハア會所から呼びさうな姥は最う

往きます。命あらば御縁次第お二人と

もに御無事でやとッ歸るぞ是も名残なる。

地茫然として惣七。親父の耳へ入るからは。

世上に知れたに極つた。四日市には思ひ

寄る方もある。地伊勢路へ向けて遁るゝだ

けは遁れて見ん。地最う七つに下つた。サ

ア用意といふ所に。惣七宿にか。早い門

の頼し様と。地潜戸を明けてつつと入るは

毛剃九右衛門。惣七狼狽へ。詞ヤ珍しい何

と。茶持て来いよといふ程九右衛門胡散顔

い。黙りや／＼惣七。大阪で逢うたは四五日

前。追付け上る京で逢はうといひ合せ。こ

りや宿替と見えた。地何とした仕だらで何

方ハ立退きやる。氣遣ひなりと言ひければ。

詞イヤ／＼氣遣ひな事でない。たつた今上

つてまだ洗足も使はず。老體の親別住居も

異なものと。一所につぼむ談合で諸道具を

引くやら取込んだ最中旅宿は何處ぞ其の中

此方から便宜せう。地休んで行きやと出で

んとす待ちや／＼。地ハテきよろ／＼女夫

ながら飲込まぬ素振り。これやがて商賣時

分。此方も明日國へ下る。仲間から預つ

た島の割符受取りに來た。其の割符を渡し

て行きや。ヲ、如何にも／＼其の割符は大

事につけ。箱に入れ封を付け親父に預けた。

地追付け是から持たせて遣らうと。云ふよ

り九右衛門色を變へ。詞三千里を股にかけ

る此の仲間。命代の割符を親父に預けたと

は。何處へうまい事いふなく。仲間を脱

けて一人備しようでな。音沙汰なしの俄に

宿替へと。丁度算盤が合うた。此の割符は

其の肌に付けて居る。知れた事。地受取つて

見せうと。大戸潜戸の鍵鑰櫛機。地かとし

めて伸し上げれば。小女郎あわてこれ九右衛

門様。地魚と水とのお仲間何の嘘がござん

しよ。此の割符は二三日中妾が屹度渡しま

しよ。地先づ歸つて下さんせと。押出す小

腕むすと取り。エ、面倒なと賣の子にどう

と投付ける。卑怯な女を痛めずとも。いふ

事は身にいへと脇差に手をかくれば。地ヤ

反を打つて嚇しても割符を取らずに置かう

かと。地すばと抜けば惣七も飛びしさつて

抜合せ。兩方腕は狂はねども繩目も弱き古

實の子。まばら朽ちたるしのべ竹。踏込む

足を踏みとめて。右へ拂へば左へかぶり。

左を切れば右を踏込み。打合ふ切先春の日

に解け行く氷踏む如く。地小女郎は中に身を捨つる掃溜の鐵帶。持つて開いて相手の刃物打落さんと立廻る。裾を簀の子にしがらみて。かつばと轉ぶ頭の上囚めく刃ぞ三匹危けれ。地四邊隣に聞きつけても恐れて慙と知らぬ顔。堪り兼ねて惣左衛門何をいふも子の可愛さ。割符を渡す怪我すなど。表へ廻り門の戸を。押せど叩けど明くこそ。櫛機の穴から覗いてはハア、く悲しや危なやと。フシもがいて裏へ駆廻る。地内には小女郎障子を外し中の櫛。相手の刃物を押へんと前に塞がり後に開き。隙間を見て打ちつくる。足踏みためず障子を我が身に負ひながら。どうと伏せば九右衛門すかさずかくる片足を。がはと踏込み小女郎が上に重り伏し。障子越しに突かんとす。詞突いたら汝一打ちと。地上に閃く惣七が切先。フシ危き中の危さなり。地親は懂れ隣り壁打毀ちく。手の出る程に壁下地引破り。割符を出し閃かす親の手つきの物いふ

ばかり。惣七きつと見付け。詞ヤイ九右衛門聊爾すな。割符渡す言分あるまい。こつちも差す。地サア差せと鞘に納めて眼前に。助かる命も親の慈悲と手共に取つて押戴きく。詞是々髓に受取れと。地渡せば駕くと見届け。詞ム、別條ない受取つた。これ惣七。互に命がけの身過ぎ。魂を研く仲間の法。切り結んだ劔の下から膝じうなるも魂。遺恨は残らぬ。氣苦勞のある顔色ぢや。山が崩れかゝつても。狼狽へぬ心持たねば此の商賣はならぬ事。地いつもの時分に又下りや。國で逢はうと暇をひ。フシ出でて行くこそそのふとけれ。地惣七小女郎を引起し今を見てか忝い。親の慈悲此の壁の崩れをせめて拜みやと泣きければ。詞ア、有難い御恩徳。慈悲心を受けながら。壁一重彼方の舅御の御面體見る事も叶はぬか。地ハア、息切れて物いはれぬ。水でも湯でもと苦しめども。茶碗一つ杓一本あら氣の毒何としよと。云ふ聲隣りに響き入り。

茶碗に温湯壁越しに。情の親の手つきを見て。ハア、冥加ない有難いと夫婦わつと泣出し。茶碗に縋り手に縋り。お盃とも薬とも氏神の御神酒とも。此の上のあるべきかと。フシ二人戴き飲交し。詞申しお手は取れどもお顔は知らぬ。私はお許しなれどお前の嫁。どうぞ御機嫌直して。惣七様とも詞を交し。地一期の見始め見納めに。お顔を拜ませ下されと。舅の手を我が顔に。押當てく泣く涙。親の歎きもあらはれて腕顫ふぞ哀れなる。地盡きせぬ涙の手を振放し。銀財布一つ投出し。早う出て往けく」と云はぬばかりに門の方。教ゆる手さへ引入るれば。今は親よ舅よと便り名残りも切れたるか。スエテ又絶入つて泣きけるが。詞ナウ不孝至極の惣七に。是程のお慈悲。路銀まで下さる、お心背くは猶不孝と。地財布を女夫が戴きく。はや人顔も見えまい。是が本の名残りぢやと。互に身用意裾引上げ泣くく。表に出でけるが。隣りの門

を遙かに見入り。調ヤレ姥只一目親父様を。

小女郎に見せてくれ。地路銀のお禮も申し

たいと小婢にいふも聞きつけて。姥が出づ

れば惣左衛門。調こりや姥何をとほくす

る。今の銀は隣の道具賣つた銀。直に隣へ

投込んだ。禮受ける筈がない。惣左衛門が

子には商ひこそ教へたれ。非道の身過ぎす

る子は持たぬ。地あさましや不便や天道も

日月も。神も佛も罰は當てはなされねど。

此方から間の下へ當りに往くとは知らぬか

や。調生身には餌食あり。人間一人生るれ

ば。乳房といふ天道の御扶持方。正道の家

職動むれば分限相應々々の。天の乳房が備

はる。正道にない銀備け。榮耀する様なれ

ど天道の乳首に放れ。三界の捨子となり。

地野倒死するは幾人か。猫は炬燵に寢臥す

る犬は土邊で物喰へど。炬燵な猫の眞似せ

ぬは。身の分量を知つたる故。畜類に劣つ

た身の程知らず。成れの果を思はれ。不便

さに腹が立つわいやと包み。かねたる涙な

り。調ヤイ惣左衛門が子になりたくば。手

鍋提けても正道に。あさましい死をせぬ様

に。命全う何卒親を先に立て。惣左衛門

が葬禮に喪服を着て供して見せ。其の時は

我が子ぢやと。棺の中から悦ぶ。地早失せ

うとばかりにて。わつと泣入りッシ泣聲の

耳に。残るを形見にて別れ。行くこそ

下巻 惣七小女郎道行

歌戀と。小袖は。一様様。身に。引締めて

合うてこそ。寝心もよく着心もよく。能く

く見限り果てられて追出されしッシ我が

宿の。四邊に顔を見られじと。戸口も店も

明けやらぬオクリ星も。夜深き親の恩重ねて

着たる其の時は。いと心も軽かりし。

ステテ今朝肌薄く行く道は。ッシ肩背へ苦しき。

フシ身の行方。ッシ心柄とは。いひながら。

情馴染の京の町。三條小橋で知る人に粟田

口かと思ひしも。先へ心の關寺に。身の衰

への。ッシ恥かしき。今の小町屋惣七は。博

多小女郎がならし竹ステテ何時も心に懸けて

置く。歌親の甲斐箱に綾錦。最早部を見ん

事も。又となるまい限りといへば。共に泣

くく愛き黒猫子の。糸の断れざる辨柄縞

の。愚痴なささら左様ではないに。羅紗

もない事。いはしや綸子な。ステテ先へ行く

子に尋ねれば。抜け参宮の頭字が耳に止ま

る神心。守り給へと再拜の。ステテ袖に神樂

の鈴鹿山。八十瀬の川に濡れ初めしオクリお

れと。和女が初戀に。二世も三世もかはら

じと登り。冷泉詰めたる。坂の下。今零落

の身と知らば。ざつと淺黄に染めうものッ

シ裏表ない。心から偽紫の色悪う。地憔悴れ

顔見る悲しやと絞る袂の涙の露野邊の草葉

も色つきぬ。泣いて心を亂せとか。かた様

ならで。歌頼む博多の小女郎がなくなれば。世

帯の花も縮緬と。こんな姿にせまいもの。

統幻の此の世から。未來々々も夫婦ぞと。

ナホヌ榊り付いてぞ。ッシ泣きるたる。歌關の。

お地藏は。親よりましと。地聞くなれど。

優さらぬ此の世の舅御の。機嫌直して給は

れと頼みを直に救ひ乗せ。共に助かる駕籠  
昇の。フシ駕籠遣りませうと歩み来るワキ地  
尾張へ行く者。先の宿迄駕籠賃幾許シテ石  
薬師迄は道は二里ある駕籠賃ころりワキこ

ろりは知らぬシテ知らずば錢百ワキそれは  
高いシテ負けて行きましよワキ七十々々ニ  
人地よいわ負けたとフシ駕籠下す。道は一筋  
駕籠二挺。二人思ひを抱き乗せて。打ち見  
るよりは肩重くシテ小川ぢやワキこそせい  
シテかたせいワキまつかせ二人杖突坂小谷大  
谷打過ぎて日影も。我もフシ行く空の。末  
果しなき。旅衣昨日今日とは思へども。都  
を出でて日数さへ。四日市にも程近き追分。  
にこそ三重着きにける。

地正しかれと心中に頼みをかけし辻占の。  
駕籠昇が詞のはづれ惣七が胸に應へ。かゝ  
らぬ繩に氣を縛られ向ふの人は下るれど  
も。我が心から身をすくめ。下りもやらす  
コレ小女郎。目先づ和女から乗換て先へ往  
きや。そんならお先へ参ります。四日市と

やらで待つて居よ。地駕籠の衆早う連れま  
してやとおりぬの駕籠の河合村。小女郎は  
何の氣もつかずフシ駕籠に任せて乗換へ行  
く。地石薬師から来る駕籠の者聲かけて。  
女中の連衆乗せた駕籠は是か。うちも聞  
いた駕籠換よい。おつと幸ひサア立てい。  
旦那殿換へます。おりて下されと駕籠の  
簾を打上ぐる。地相手は駕籠をはや下りて  
提けたる風呂敷包。身輕い出立の拾腿引ハ  
簾脚絆に身を堅め。腰に早繩見るからぞつ  
と惣七が。餘所見る顔は我が顔を見せじと  
忍ぶ頼冠り。心早に下り立つて。駕籠の衆  
太儀と乗換ゆる。駕籠の簾我が手に取つて  
引き下し。急ぎの者ぢや増やらう。サア駕  
籠やつたといふ聲はフシ人の耳にも頼ひ  
けり。地小町屋惣七捕つたと聲を打ちかけ  
る。駕籠により空の細引網。中にはと腕  
けども翼なければ飛ばれもせぬ。駕籠の鳥  
かや惣七は中に音を泣くばかりなり。かね  
て相圖の小屋の者。十手提げくるくと押

取り巻き。科は心に覺えがあらう。其方  
共に仲間八人。分明の仰を請け我々捕りに  
向うたり。尋常に召捕らるゝか。踏付けて  
繩かけうかと地いへども念佛の聲の外。何  
の答もあらざれば。爰は途中次の宿迄此の  
儘連行。繩かけて國へひけ。それ駕籠遣  
れ心得ました。とても遁れぬ命ぢやに爰で  
繩をかゝらいでと。呟きく立寄つて駕籠  
昇き上ぐればがばくと。駕籠から漏れて  
流るゝ血は。大地に毛氈引く如く乗客はう  
んうん喚くにぞ。地やれ駕籠の内ので自害し  
た。地出合へくと駕籠投捨て恐れて側へ  
フ寄りつかず。地役の者ども立ちかゝり網  
引退け。簾上ぐればこは如何に。一尺五寸  
切刃際まで突込んで。刃先は弓手の脇腹に  
虫の息眼はぎろく。フ呆れて。詮方なか  
りけり。地斯る所へ小女郎が身にもかゝつ  
た縛り繩。引かれて来る身の悲しさより此  
の有様を見る悲しも。流れし血潮踏みしだ  
き。駕籠の内へ顔差入れ。小女郎が来まし

き。そんならお先へ参ります。四日市と

た妾も今縛られた。繩かゝりましたぞや。昨夜までも一つ枕に起臥して。二所と契り交したに。此方様一人が先立つて存らへ物を思へとか。苦

しうござろじゆつないかと。いふも涙に掻きくられて前後も。覺えず泣き居たり。惣七苦しき

口を見開き。爾ヲ、繩かゝつたか小女郎。國法を破り親に不孝の大悪人。廣い世界に狭められ、

所の住居もならぬ様に身を持ちなし。落付く方なく當所なく。此の所まで迷ひ來て天の綱地

の繩に擲められし此の惣七。故郷に引かれ死罪に遣はば一門の面に血を濺ぎ。親へは不孝の上

塗と思ひ定めての自害。毛剃九右衛門が海賊に與し。今迄身に纏ひし縲子縮緬。和女に着せ

た綾錦の冥加に盡き。菰被る身に成り果てた。地夫につる、慣ひと和女まで繩をかけ。名を

流させ憂目を見するは我が一心より事起る。此の惣七がなかりせば今の憂い目は見せまいも

の。不便やさぞ。フシ悲しかろ。地長くも添はぬ物故に命の妨までなしたよな許したもれ小女

郎と。いふ聲もはや息ぎれしステ頼み。少なくて見えにける。地鏡く見ゆる捕手ども。獄屋へ渡

しては叶はぬ事人は互。兩方名残惜ませよとフ

シ料簡するこそ優しけれ。地聞けば聞く程猶悲しく。其の起りは誰がさすぞ。小女郎を人手

に渡すまいとの御心から。親御に換へ命に換へ女房に持つて下されし。地それ程妾が可愛いか。

冥加ないとも忝いともお前に禮をいふ詞。日本は愚かの事唐土天然にもよもあるまい。此の

手が自由になるならば。拜んで死にたうござんすと。夫の膝に顔さし寄せステ消入り絶入り咽

せ返れば。此の世で逢ふは今ばかり。來世も變らぬ女夫ぞや。南無阿彌陀佛の。聲も微かに脇

差ぐつと抜くより早く息絶えたり。小女郎わつと聲を上げ。待つて下され連立ちたい。遅いか

疾いか殺さるゝ我が命。皆様お慈悲に今爰で殺して下され殺してと。フシ狂ひわな、き駈廻る。

地斯る所へ檢非違使の某眞先立ち。此處彼處にて召捕つたる海賊輩。傾城交り繩付とも一度

に彼處へ引き來る。地檢非違使一札押開き。囚人どもに申し聞かす趣。有難く承れ。一沖が

かりの大船に通路を求め。波を潜り水底を抜け船へ近付き。諸色を奪取りし事。國法を背く大

罪武士に仰せて死罪あるべき所。當今御即位の御悦びによつて死罪一等を勅免なりと。地聞

きも果てず繩付ども。蘇生たる心地して。フシ一度にあつとぞ勇みける。地重ねて傾城どもに打

向ひ。爾汝等は流れの身。彼奴等に添ふは勤の慣ひ科にあらず。行先とても構ひなし。地繩を

許せとありければ畏つて雑色ども。立寄り解く繩の跡吹擦り撫擦り。國王様の意氣方は又格別

な物ぢやないか。地此の手が自由になりたれば廓の門を出た様など。フシ笑ひ悦ぶ其の中に。

地小女郎は始終しく涙留め兼ねたる顔ふり上げ。地良人の惣七殿斯る御慈悲を待受けず。

妾を捨て此の世彼の世へ飛び去りて。地比翼の鳥の片翼今が博多の此の小女郎。生きてかひな

き命ぞや。お慈悲に殺してたべなうと聲も。惜まず泣きたる。爾ヲ、尤々。夫惣七同類とは

いひながら。色に迷ひし若氣の至り。罪の輕重明白たり。地自害せしは其の身の不祥。地夫に成

り代り。親惣左衛門に孝行盡し後世を弔ひ得さすべし。勅に任せ彼奴輩をぞ追拂へ。重ねて悪

事を止まの。顔に煙鐵入煙。耳殺ぐ鼻割ぐちみどろちんがい追拂ふ。隣國他國幾萬人博多。小

女郎が物語語るも聞くも後代の永き。噂を残しけり。